

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593475

研究課題名(和文)統合失調症患者の主体的回復を育む援助プログラムの構築

研究課題名(英文)Development of a Support for the Active Recovery of Patients with Schizophrenia

研究代表者

水野 恵理子(MIZUNO, Eriko)

山梨大学・総合研究部・教授

研究者番号：40327979

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、統合失調症患者が捉える病からの回復の意味と回復過程における精神保健医療従事者の位置づけを明らかにすることである。地域で生活する統合失調症患者は、精神障害者であることを認めることへの揺らぎを抱えながらもより良く生きるために努め、社会における自分の役割を見出そうとする能動性をもっていた。支援者は回復を、「病気がなかったときのような普通の生活」と「病気を経て変化した新たな生活」とイメージし、中でも精神科看護師は長期入院患者に対する回復の期待を諦める傾向があった。精神保健医療従事者は、統合失調症患者が生きることの自覚と意思をもっていることに気づき、それらを支えることの重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The objective of the present study was clarify the significance of the active recovery of patients with schizophrenia from the illness, as well as the positions of mental health care providers on the recovery process. The community-dwelling persons recovering from schizophrenia lived trying to live better, while having the conflict of recognizing they have a mental illness. Also, they were aware of their responsibility to live with integrity, tried to find their role in their relationship with society and an adequate proactive mindset. The staffs had bilateral views on recovery, 'normal living, the same as when the persons was healthy' and 'a new life, changed due to the illness.' Some nurses did not expect any change from the long-term inpatients. It is necessary to examine approaches that support the identities of persons who have been treated for schizophrenia and allow them to live comfortable within their communities.

研究分野：精神保健看護学

キーワード：統合失調症 主体的回復 地域精神看護

1. 研究開始当初の背景

2002年厚生労働省より出された、「入院治療から地域における保健医療福祉を中心としたあり方への転換」の方針以降、精神保健福祉法の改正、精神科病床の削減、障害者自立支援法の制定から障害者総合支援法への改訂、精神疾患の医療政策基本方針への追加が行われてきた。このような地域医療計画を反映した取り組みの一方で、長期入院患者の退院支援が遅々としていることは課題となっている。様々な行政的整備は患者と家族の支えとはなるが、地域社会で暮らすためには患者自らの病からの回復への意思が必要となる。精神疾患の回復概念は、精神病状態からの立ち直り、人生に新たな意味と目的を見出すこと等様々あり、未だ定まったものはないが、患者の病気や治療に対する自覚が問われるものである。また、精神疾患患者の回復研究の動向をみると、統合失調症患者自身が捉える回復、Recovery Assessment Scaleの開発、精神症状と社会的機能の指標を用いた長期経過研究、相互支援グループの回復過程への影響、回復教育の実践報告など国内の研究は蓄積されている。しかしながら、統合失調症患者の主体的な回復の意味を詳細に記述したものはみあたらない。さらに、平成20～22年度基盤研究(C)「統合失調症患者の配偶者の病いの体験と家族支援に関する研究」では、回復に効果的な支援者の関わりを見出すことに余地を残した。従って、統合失調症患者の主体的回復の意味を明らかにすることは、患者が一個人として生きることを支える援助についての新たな知見が得られる点で当該研究は意義があると考えた。

2. 研究の目的

統合失調症患者の内面にある、良くなるうとする意思と病気や治療に対する自覚を、彼らの生きる力に還元することを目指す。そこで、統合失調症患者が捉える病からの主体的回復の意味と回復過程における精神保健医療従事者の位置づけを明らかにする。そして、回復への意思を育むための看護援助プログラムの構築へつなげる示唆を得る。

3. 研究の方法

(1) 文献検討

統合失調症患者の病識、回復、社会参加、エンパワメント、回復過程における支援者の介入に関する先行研究の検討を行なった。

(2) 面接ガイドの作成

文献検討の結果をもとに、研究分担者と面接ガイドの設問項目を吟味した。海外の精神障害者支援施設の利用者と職員への面接に使用するため、面接ガイドは英語版と日本語版を作成した。

(3) 面接調査の準備

当該研究課題について研究代表者の所属機関の倫理委員会の承認を得た後、International Center for Clubhouse Developmentの認証を受

けている欧米のクラブハウスと東アジア圏内の国の精神障害者支援施設30ヶ所を選定し、訪問目的、研究内容についてメールで依頼した。その結果、8箇所より返信があった。日程の都合を考慮し、オーストラリアブリスベン、シンガポール、香港、台湾台北市、台湾高雄市の施設へ訪問することとした。

(4) 海外の精神障害者支援施設の見学・情報交換、面接調査

香港 Phoenix Clubhouse (David Trench Rehabilitation Centre) 訪問、情報交換、利用者1名と職員1名のプレ面接、Queen Mary Hospital 精神科外来の見学

ブリスベン Canefields Clubhouse 訪問、施設のプログラムへ参加、利用者4名、職員4名の面接

シンガポール IMH (Woodbridge Hospital, Community Wellness Centre) 訪問、IMH看護部長と情報交換、看護教育センター、精神科病棟、外来、精神科救急外来の見学

台北市康復之友協會、咖啡坊 Easy Coffee、住安康復之家、孫媽媽工作坊、清新坊長青關懷中心、高雄市康復之友協會、仙人掌社區復建工作坊花之語社區作業所、新北市慈芳關懷中心の見学、情報交換

(5) 国内の面接調査

長野県および東京都内の精神科病院と精神障害者支援施設7ヶ所の入院患者、通所者、職員に対する個別面接

個別面接対象と職員8名に対するフォーカス・グループ面接

(6) 分析、成果発表

文献検討のまとめ、面接記録の内容分析を行い、それらの結果を国内外の精神保健看護学領域の学会や学術誌に発表

4. 研究成果

(1) 文献検討の結果

看護の視点から国内の回復研究の検討結果を、3rd UK-HK Joint International Conference-Mental Health for all (香港)で発表した。1993年～2012年の医中誌をデータベースとし、統合失調症、回復、看護で検索したところ、181文献が抽出され、このうち原著論文23文献に絞った。量的研究7件、質的研究11件、質量の折衷型研究2件、事例研究3件であった。回復に関する看護研究では、信頼、自尊感情、自己効力感、自己洞察がキーワードとして挙がり、回復には患者の主体性が重要であることを強調していた。

(2) 面接ガイドの内容

患者・利用者用：病棟・利用施設はどのような場か、施設での役割、回復を実感する場面、回復に必要なこと、社会参加について考えること

職員用：精神疾患からの回復をどう考えるか、回復に必要なこと、回復過程における役割、精神疾患のスティグマについて考えること、患者の社会参加について考えること

フォーカス・グループ面接のテーマ

統合失調症からの回復とはどのようなことだと考えるか、回復にはどのようなことが必要か、回復過程における役割について

(3) 面接内容の分析結果

精神科病棟看護師の回復に対する思いに焦点をあて内容分析した結果を、14th International Mental Health Conference (ゴールドコースト)で発表した。回復について、病状の変化、患者から一個人への2つのカテゴリー、および精神病症状の軽減、疎通性の改善、行動範囲の拡大と外世界へのなじみ、隔離と拘束からの解放、退院、患者の個性の出現の6サブカテゴリーを抽出した。看護師は病棟内寛解を回復とみなす傾向があった。長期入院患者の回復に対する期待はもちにくく、積極的な働きかけを諦める傾向が認められ、看護援助に対するモチベーションを軽減させる可能性があることが示唆された。

職員対象のフォーカス・グループ面接の分析結果を、日本精神障害者リハビリテーション学会第22回いわて大会(盛岡市)で発表した。支援者は回復について、病気がなかったときのような普通の生活と病気を経て変化した新たな生活をイメージしていた。そして回復には、決断力や自身を客観視する力、対人関係調整力が重要と考えていることが明らかになった。

長期入院患者対象の面接の分析結果を、World Psychiatric Association Regional Congress 2014(香港)で発表した。患者は長期の入院療養に退屈している一方、何らかの変化を求めず、現状維持を望み、病棟を安住の地とすることを良しとしていた。安心や安定を感じられる環境は大切ではあるが、受け身になりすぎたり意思を失ったりすることがないように適度な刺激を与えることは必要である。

外来通院患者の面接の分析結果を学術誌 Archives of Psychiatric Nursing へ発表した。地域で暮らす統合失調症患者は、生きる責任を自覚し、希望や目標をもち、社会において自分ができることは何かを模索していた。彼らは病に圧倒されているわけではなく、十分な能動性をもっていた。また、日々他者の眼差しを感じ、自分が精神障害者であることを認めることの揺らぎをもちながらもより良く生きるための努力を続けていた。この原動力は一人の人間として存在する自分を主張することであると考えられた。

平成17~19年度若手研究(B)「在宅統合失調症患者の家族の健康への力を支える看護援助モデルの構築」の一部である、統合失調症の子どもをもつ父親の病気への対処と向き合い方をまとめ、学術誌(日本健康医学会雑誌)へ発表した。父親は母親と異なる責任感をもって子どもと接し、間接的に日常的ケアを行っていた。また、自分の感情を表出することが少なく専門職とつながりにくい傾向があるため、父親自身がケアされる場の提供の必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

Mizuno E, Iwasaki M, Sakai I, Kamizawa N, Experiences of community-dwelling persons recovering from severe mental illness, Archives of Psychiatric Nursing, 29(2), 127-131, 2015, 査読有, DOI <http://dx.doi.org/10.1016/j.apnu.2014.12.001>

岩崎みすず, 水野恵理子, 統合失調症の子どもをもつ父親-病気への対処と向き合い方-, 日本健康医学会雑誌, 22(1), 36-42, 2013, 査読有, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009611491>

〔学会発表〕(計4件)

Mizuno E, Iwasaki M, Sakai I, Kamizawa N, Recovery of long-term inpatients with schizophrenia, World Psychiatric Association Regional Congress 2014, December 12-14, 2014, 香港(中華人民共和国)

岩崎みすず, 水野恵理子, 支援者がとらえた統合失調症からの回復 - フォーカス・グループインタビューを通して -, 日本精神障害者リハビリテーション学会第22回いわて大会, 2014年10月31日~11月1日, いわて県民情報交流センターアイーナ(岩手県・盛岡市)

Mizuno E, Iwasaki M, Psychiatric nurses reactions toward recovery from schizophrenia, 14th International Mental Health Conference, August 5-7, 2013, ゴールドコースト(オーストラリア)

Mizuno E, Iwasaki M, A literature review on nursing for recovery of persons with schizophrenia in Japan, The 3rd HK-UK Joint International Conference-Mental Health for All, December 8-10, 2012, 香港(中華人民共和国)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

山梨大学研究者総覧

http://erdb.yamanashi.ac.jp/rdb/A_DisInfo.Scholar/4_5_3/478E1393B86E89D1.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水野 恵理子 (MIZUNO, Eriko)

山梨大学・総合研究部・教授

研究者番号：40327979

(2) 研究分担者

岩崎 みすず (IWASAKI, Misuzu)

飯田女子短期大学・看護学科・教授

研究者番号：00461872

(3) 連携研究者

なし